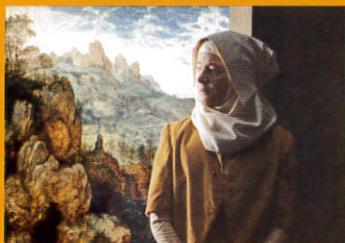


新作映画情報

『ブリューゲルの動く絵』



ルドガー・ハウアー扮するブリューゲルが案内人となり、フランドルの民衆の慎ましい日常生活をなぞりながら、名画「十字架を担うキリスト」に秘められた意味を解き明かしていく。まるで絵のなかに入り込んでしまったような、不思議な体感型アートムービー。

12月17日(土) 渋谷・ユーロスペース
にて公開 他全国順次

監督／製作：レフ・マイエフスキ
脚本：マイケル・フランシス・ギブソン、
レフ・マイエフスキ
キャスト：ルドガー・ハウアー、シャーロット・ランプリング
配給：ユーロスペース+ブロードメディア・スタジオ
配給協力：コミュニケーションズ・センター



© 2010, Angelus Silesius, TVP SA

ました。木から彫りおこした原物のミケランジェロのダビデ像があるのですが、どうしようもないものがまず最初に置かれている（笑）。これが500年分の美術の進化といえるのでしょうか？　まずアートがあり、その後20世紀が始まると同時にアートの乱用、悪用が始まってしまったのです。

■なぜそのような状況になつてしまつたとお考えですか？

ビジネスがそれを許容してしまつたからです。

まつたから。ある意味病のよくなものでしようか。とても深く難しい問題だと思いますね。でも考えてみたらフランコ、ヒトラー、スターリンなどはその方向性を止めようとしていたようにも思える。彼らがしたことは無謀な策であり、失敗だつた訳ですが。それは置いておいて、人々は美と神、そういう存在と離れてしまつたのではないでしょうか。現在の語彙の中でもピューティーというのは禁じられた言葉のようにも感じます。アーティストとしての義務とい

うのはまず皮肉、ポストモダンの感覚あり、ジョークが使えたければいい。逆にシリアルアートにいきたいことであれば本当に危険な分野にいくことになる。私が現代の文脈に400年前の意識を持ち込んだ為に何故かアヴァンギャルトと呼ばれるようになつてしまいました（笑）。

ピーテル・ブリューゲル 『十字架を担うキリスト』
1564年 124×170cm 美術中古美術館

映画を撮ろうと思つたきづかけ
は何でしょうか？

ウイーンの美術史美術館にあ
るブリューゲルの傑作絵画群、
『バベルの塔』や『雪の中の狩人』、
そして『十字架を担うキリスト』
を見ていて恋に落ちてしまいま
した。彼自身がつくりあげた物
語に惹かれたし、非常に映画的
だと感じました。キャラクター
がフェリー二の映画から飛び出
してきたような感覚を受けまし
たね。ブリューゲルの絵自体を
映画にしようという気は最初は
なかつたのですが、マイケル・
フランシス・ギブソン著の『十
字架を担うキリスト』について

考査した書籍「The mill and the Cross」がきっかけになりました。その本を読んでイメージがすぐ浮かび、ブリューゲルの映画を創るのは今しかないということを告げられたような気がしました。でもアートエッセイをペー
スに映画を描くなんて馬鹿げているともギブソンは言ったわけですが（笑）。

■この映画に描かれている物語は、現代にも通じる寓話だと感じました。監督にもそのような意図はありますか？

私は作り手があるので自分で分析はしないほうが賢明かと。ただし、作品を創りあげる構造として、様々な逆の要素、反作

ブリューゲルについても、逆の要素が自分で中で共存していることを作品で示していると思います。喜びすぎることは良くない、悲しみすぎることも良くない、すなわち善と悪の距離さえ分かつていいのだから、というような言葉があります。そのような思考を持ったアートはとても興味深い。それに比べて現在のアートは思考があまりにも欠けていますね。

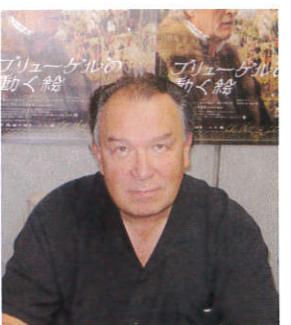
■ 現代のアートにはブリューゲルが持っていた哲学や思考が足りないということでしょうか。

前述の、ブリューゲルのたつた一枚の絵についての320頁

容に無駄なところがなく、とても奥深い。では逆にモンドリアンやウォーホルについて何頁書けるでしょうか? 21世紀になつてから皆はヴィジュアル的なコードにしがみつき、それに囚われたままで。モンドリアンは色々な情報をそぎ落としていくということに貢献した人間であることは私も認めますが、それはもう消費してしまった。その後何を見せてくれるのか。一週間前はフィレンツェにいたのですが、アカデミア美術館に現代の彫刻作品が並んでいて、そこによく知られるバゼリックの『ダビデの足の習作』があります。内

ブリューゲル絵画と現代アートの乖離

数々の映画制作にかかる他、ビデオアーティストなどを手掛けるアーティストでもあり、詩人、舞台演出家でもあるレフ・マイエフスキ。今回、ブリューゲルの『十字架を担うキリスト』を題材にした映画をつくり、宣伝のために来日した。映画の話だけではなく、痛烈な現代アート批判も飛び出したインタビューとなつた。



レフ・マイエフスキ